

氏 名 菅瀬 晶子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 914 号

学位授与の日付 平成 18 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティ  
ティの様態—ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の  
事例研究—

論文審査委員	主 査 教授	竹沢 尚一郎
	教授	野村 雅一
	教授	出口 正之
	教授	白杵 陽（日本女子大学）
	教授	宇野 昌樹（広島市立大学）

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、イスラエルにおける宗教的・民族的マイノリティであるアラブ人キリスト教徒、そのなかでもメルキト派カトリック信徒の持つアイデンティティの様相、つまり自己定義のありかたと、帰属意識のゆくえについて明らかにすることである。メルキト派カトリックは18世紀にオスマン帝国治下のシリアで誕生した、カトリックとギリシャ正教の複合宗派であり、ローマ・カトリック傘下に属しながらも、独自の教会組織を持つ。ユダヤ国家であるイスラエルにおいてアラブ人であり、イスラーム中心のアラブ人社会においてキリスト教徒として生きるメルキト派カトリック信徒は、三重のマイノリティであることを自覚しつつ、あえて周縁に立ち、幾通りものアイデンティティを駆使している。彼らの民族誌を記述し、そのアイデンティティの様態を、背後にある事象とからめて考察した。以下からは論文の中軸をなす第2章から第5章の内容について、要約する。

第2章では、メルキト派カトリック信徒のみのアラブ人農村であるF村を調査地として、メルキト派信徒のみが存在する社会の様態を記述した。村落社会の基盤は、ダールと呼ばれる父系親族集団にある。すべての村民はダールに属し、オスマン帝国時代の名残を残した地方行政制度である村議会制のもとで、一部の有力ダールが権力を握っている。ダールには村への定着の歴史に則した序列が存在し、その序列は婚姻関係に大きな影響をおよぼす。婚姻関係によって派閥が生じ、村の行政者である村長と村議会議員を選出する村議会議員選挙は、有力ダールの権力のせめぎあいの場となっている。

F村における村議会制の特徴は、マパイ・労働党の影響が近年まで根強く残っていたことである。1970年代までイスラエル与党の座にあったマパイ・労働党は、ガリラヤ地方農村部のアラブ人への影響力を強めるために、各地で地方行政の要である有力ダールに接近した。ことにメルキト派信徒は、イスラエル建国当初のメルキト派ガリラヤ司教がマパイ党員であったため、その影響を他の宗教・宗派信徒よりも強く受けることとなった。マパイ・労働党の影響力は比例代表制である国会議員選挙でより濃厚であり、アラブ人の政党が出現しても、F村村民は村の有力者がマパイ・労働党員であるがために、マパイ・労働党へ投票し続けた。近年、メルキト派信徒の国会議員の出現により、ようやくその傾向は薄れつつある。

このような投票傾向からは、F村の生活全般における、ダールへの帰属意識と出身地であるF村への帰属意識、さらにはメルキト派カトリック信徒としての自覚の影響力の強さがうかがえる。この3つの帰属意識に基づき、彼らは身内と他者の境界線をもうけ、帰属意識はダールの一員、F村出身者といったアイデンティティを構成してゆく。しかしながら、時として身内の境界は同ダール出身者、同郷出身者の枠を越えることがある。その現象が顕著にみられるのが、F村村民が労働者として移住した都市ハイファである。このため、第3章では調査地をハイファに移し、そこでのF村出身者の生活を追った。

ハイファにおいて、彼らは私的な共同体を形成し、そのなかで相互扶助関係を結ぶ。その環のなかに招き入れられるのは、同ダール出身者、自ダールと血縁関係のあるダールの出身者、F村出身者であるが、さらにはF村出身ではないメルキト派カトリック信徒も招き入れられるようになる。アイデンティティの構成要素の重心が、ダールと出身村からメルキト派信徒であることに移動してゆくのである。しかしながら、メルキト派信徒として

究に新たな視座を提示したといえる。イスラエル国内の他のマイノリティ集団、あるいは他地域のメルキト派カトリック信徒、他の紛争地域のマイノリティ集団と比較することによって、「他者との共存」という視点からアイデンティティ研究を深化させてゆくことを、今後の課題として予定している。

本論文は、イスラエル北部のガリラヤ地方に居住するメルキト派カトリック信徒のアイデンティティの諸相を、地域研究の観点から明らかにしようとするものである。メルキト派カトリック信徒は、イスラエルに住むアラブ人であること、アラブ人の中でもキリスト教徒であること、そしてキリスト教の中でも少数派のメルキト派に属すること、という三重の意味においてマイノリティ集団といえる。彼らに関するまとまった研究は、これまでわが国はもちろん、イスラエルにもほぼ皆無であり、その意味で本研究はきわめて貴重な意義を有するものである。

本論文は、序章のほかに5つの章からなっている。序章では、従来のイスラエル・アラブ研究が政治的な負荷を帯びてなされてきたこと、その結果、アラブ社会が一枚岩的に捉えられてきたことを批判的に総括した後に、本論文を1990年代以降のイスラエル・アラブ研究の新しい潮流の内に位置づけている。すなわち、アラブ人内部の多様性に注目すると同時に、彼らの帰属意識や他者との共存への関心等を解明しようとする潮流であり、本論文がメルキト派キリスト教徒のアイデンティティ構築への着目を中心テーマとしているのはそのためである。

第1章では、18世紀初頭から現在に至るまでの、メルキト派カトリック教会とその信徒たちの歴史を辿っている。メルキト派は、シリアやレバノンを中心に約160万の信者を擁するカトリックの一分派であり、そのほとんどがアラブ人である点に特徴がある。かれらはオスマン帝国の周辺地であるガリラヤ地方に根を張り、ヨーロッパ諸国とシリア内部を結ぶ中継交易の担い手として活躍した。その後、彼らはイギリスの植民地支配とイスラエル建国という歴史的有為転変の中で、独自の文化的特徴を維持してきたことが明らかにされている。

第2章では、メルキト派カトリック信徒のみが住むアラブ人の一農村をフィールドに選び、彼らのアイデンティティの諸相を明らかにしている。その核になるのは、父系の出自集団としてのダールであり、ダール間の序列と連携を通じて村民各自のアイデンティティが形成されている様が、国政選挙および村内政治等における葛藤や戦術を踏まえながら、詳細に描かれている。

第3章、第4章では、北部イスラエルの拠点都市のひとつであるハイファにおいて、メルキト派信徒がどのようにアイデンティティを構築しているかを、フィールド調査に基づきながら論じている。ハイファは、ユダヤ人、ムスリム、ローマ・カトリック信徒などが混在する都市であり、その中で独自の宗教意識をもつ彼らが、ダール、出身村落、社会階層、カトリック教会などへの帰属意識を軸に、経済活動や政治活動、祭礼行事などに応じてそれらを柔軟に使い分けながら、したたかにアイデンティティを構築している様が詳細に描かれている。

第5章では、以上の記述をもとに、イスラエル国内のメルキト派カトリック信徒のアイデンティティ構築を明快に整理し、アイデンティティ研究への寄与をなしている。

冒頭で述べたように、本論文は、イスラエルに住むメルキト派カトリック信徒に関する初めてのまとまった研究であり、先駆的意義を有するものである。と同時に、三重の意味でマイノリティとして位置付けられる彼らのアイデンティティ戦略の柔軟さを、村内のポ

リティクスや、都市における経済活動、祭礼行事、他集団との交渉過程等に注目しながら描き出しており、マイノリティ集団研究としても高い評価が与えられるべきである。その一方で、彼らのアイデンティティの核になるはずの親族概念の定義が不明確であること、アイデンティティを彼ら自身の視点から描くことに集中しているために、他者の視点が軽視されていること、等の課題を抱えていることも事実である。

これらは今後の課題といえるが、本論文が高い学術的意義を有していることは明らかであり、審査員全員一致して、学位の授与に値すると判断した。